

忘れられた パンデミック

スペイン・インフルエンザ

▶ 中

「流行性感冒と診断され、直ちに御仮床にお就きになり、以後十五日の御床払まで安静に過ごされる」

1918年11月3日の昭和天皇実録の記述だ。「スペイン・インフルエンザ」は「流行性感冒」といわれ、皇太子だった17歳の昭和天皇も患った。皇室では感染した竹田宮恒久王が19年4月に肺炎で死去している。

欧米の大流行から4カ月ほどたった18年10月ごろから日本でも本格的な流行が始まった。国内では2度の感染爆発を迎えることになるが、「前流行」と呼ばれる時期だ。

22年刊行の内務省衛生局

日本人の4割感染

2度の襲来、村は全滅

スペイン・インフルエンザの感染防止のため、マスクを着用した女子学生。ゲッティイメージズ提供



編「流行性感冒」は「交通の周囲村落を侵襲するを常頻繁なる都市に発し之(こ)とせり」と記述している。れ)より放射状に其(そ)「スペイン風邪」を主題にし

た国内唯一の書籍、速水融「日本を襲ったスペイン・インフルエンザ」によると、感染はほぼ3週間で全国に広がったという。

新聞はさかんに「流行性感冒猖獗(しようけつ)Ⅱ猛威」と報じ、東京では「各病院は満杯となり、新たな『入院は皆お断り』の始末であった」(前掲書)。死者の急増で各地の火葬場は大混乱となった。

同書によると、医療体制の整っていない地方はとくに悲惨で、患者の半数以上は治療を受けられない村(青森県北津軽郡)や人口約1000人中970人が感染して70人が死、「一村全滅」(福井県の山間部)と報じられた地域もあった。

医療従事者の感染も深刻で、「医者という医者がほとんど風邪で寝こんでしまつて動きができず、まだ壮年の医者が相次いで亡くなった」(熊本県「新宇土市史」)。海外と同様、若年層の犠牲者が多かった。

著名人では評論家の島村抱月が感染で亡くなり、女優の松井須磨子が後追い自殺する悲劇が起きた。前流行は翌19年の夏前には収束した。内務省の記録では患者は約2117万人、死者は25万7000人。当時の国民の4割が感染し、死亡率は1・22%だった。

そして同年秋から「後流行」がやってくる。毎年12月1日は徴兵された新兵の入営日で、そこから感染が爆発的に広がる。「この軍隊における罹患(りかん)る。(編集委員 井上亮)

こそ、本格的な『後流行』の点火剤となった」(「日本を襲ったⅠ」)

密閉・密集・密接環境の軍隊は感染の温床で、20年1月の新聞は陸軍の内外の患者約2万6000人、死者約1300人、死亡率5・2%と伝えている。海軍でも前流行期に軍艦「矢矧(やはぎ)」で乗員469人中306人が感染、48人が死亡する惨事があった。後流行は20年夏に収束。患者は約241万人、死者は約12万8000人だった。感染が前流行の1割に激減したのは多くの人が免疫を獲得したためといわれている。一方、死亡率は5・29%と4倍以上に跳ね上がった。

内務省の記録では全流行期間の総感染者約2380万人、死者約38万9000人、死亡率1・63%とされている。速水融氏はこれを過小とみて、死者は約45万3000人と試算している。(編集委員 井上亮)